対談特集　水道管路技術の維持・向上に貢献する民間企業の新たな役割

～フソウによる水道管路研修施設建設の意義を踏まえ～

フソウが新たに高松市内に大口径管路も含む管路技術に関わる研修施設の建設を進めていることは、水道界への多大な貢献が期待できる取り組みとして各方面から注目を集めている。本紙では、民間企業による水道界への新たな貢献の方向性をテーマとする対談特集を企画。研修施設における講習会開催を視野に同社と協定締結するなど、その動向に強い関心を示す日本水道協会の青木理事長と幅広い視点での官民連携の意義について語り合っていただいた。

日本水道協会理事長
青木 秀幸氏

フソウ代表取締役社長
角　尚宣氏

水道関係企業の地域における役割

角社長　本日は、大変ご多忙のところ、遠路、高松までお運びいただき、当社のテクノセンターをはじめとする関係施設をご視察いただき、誠に有難うございます。日頃からの当社へのご指導と併せて、改めて感謝申し上げます。そして、水道業界の先頭に立って牽引されていらっしゃる青木理事長と意見交換させていただく光栄を胸に刻み、今後に向けて多岐にわたりご示唆いただけるものと期待申し上げます。どうぞ宜しくお願い致します。

青木理事長　こちらこそ、貴重な機会をいただき、有難うございます。当地の関係施設を一通り拝見し、フソウが地域に根差した企業活動を展開されていることに感銘を受けました。さらに、地域に貢献するフソウテクノセンターのコンセプトは水道界への貢献に大いにつながるものであり、大変心強く感じました。角社長とお話しさせていただくことで、私が標榜する「国民理解」のためのヒントが多々得られるものと楽しみにしておりました。どうぞ宜しくお願い致します。

角　有難うございます。はじめにご視察の印象について伺えますか？

青木　まず、申し上げたいのは、「国民理解」につながる要素を多々包含しているということです。水道界が抱えるヒト・モノ・カネに関わる課題を解決できる特効薬はありませんが、突き詰めれば国民に水道を本質的に理解していただき、自分達の「財産」であるという意識を持ってもらうことだと考えています。その点、テクノセンターでは住民参加の「場」を意識され、さまざまな取り組みを進められていることはとても素晴らしいですね。そもそもこうした意識はどのような局面で育まれ、あるいはどのような歴史に根差したものなのでしょうか？

角　当社は、大手メーカーの代理店としてスタートし、パイプインフラ関連業務を生業とした歴史があり、水道に対する思いは強いものがあります。その根底には、水道の拡張時代に住民に感謝された原体験があります。管工事をやっていますと、かつては住民の皆様がお茶を持ってきて労ってくださる日常がありました。当社は、その原体験を大切にしたいと考え、テクノセンターにそのコンセプトを注入しました。さらに、地域の避難施設に指定されていることからも開かれた施設を志向していることは、先程のご視察でもお感じになっていただけたと思います。そして、このコンセプトは施設だけでなく、企業活動にも反映しております。かつての地域での原体験の回帰は、近年の基幹施設の更新時代においては、大規模DB等の案件へのアプローチもさることながら、それぞれの地域で実施されます簡易DBや管路更新工事等を通じて、地元の水道事業に貢献していく姿勢を強めております。水道事業体が厳しい事業環境にある中、我々企業においても効率性の追求が求められますが、時には非効率な「貢献」も必要と考えております。これは、「原体験」が培ったDNAとも言えます。

青木　なるほど…。テクノセンターを拝見して、地域に開かれた施設という意味で他に類を見ない特徴を感じましたが、それも長年にわたる地域に寄り添う姿勢に根差した企業活動が作用していることと理解いたしました。

角　整備・拡充の時代の思いを継承することは企業としてとても大切でありますし、市民の会話にも自然と「水道」が出てくることになればと願っております。

青木　地域にこんな会社があることを住民が認識すれば、自ずと水道への理解も深まります。これも広い意味での官民連携ですね。

水道事業の課題解決の方向性

角　今、理事長から視野の拡がりの中での官と民との連携の意義についてご示唆いただきましたが、その点についてのお考えを伺えますか？

青木　私は、最近は水道を「重要なインフラ」ではなく、「最重要なインフラ」と言っており、水道の価値は、安全で安心な水を一定量、永続的に使い続けられることです。この使命を果たすためには、特に非常時を思えば、先程、角社長が言われたように普段は使用しない資機材や場所などをストックするなど、効率性を追求する企業活動においては本来限界があります。だからこそ、テクノセンターや整備中の管路研修施設には大きな期待が持てるわけですが、一方で関係する企業に過度の負担を強いることはできません。料金で全てを賄うことが難しい中、「公」がどの程度まで負担するのか？このジレンマを克服するには、例えば国費の注入も含めた様々なアイデアなり、考え方があるはずです。

角　民間企業ができることとしては両面あると考えており、企業として徹底的に効率性を追求する一方で、有事の際の備えというある意味非効率な営みもしっかりやる必要があります。この部分で着実に力を発揮するためには効率性を存分に発揮する必要があり、企業活動としてはこのバランスが大切になります。当社グループは「水」と「住まい」と「エネルギー」という3つを事業領域としておりますが、これ自体が非効率なものも多く、他にやっている会社はないと思っておりますが（笑）、ここに拘ることには明確な理由があります。企業理念に掲げている「水と共に生きる」を実践するためには住民目線が大切という認識があります。だからこそ、「住まい」を事業領域にすることで水道の最終地点に関わることができます。そして、「住」に取り組むことで、水道への付加価値を高めたいと考えています。水道料金の上昇幅をいかに抑制できるのかということに民として挑戦していくことも必要です。給水原価を下げるためには人件費やエネルギー消費の抑制が視野に入ってきますが、だからこそ当社はエネルギーを事業領域として活動し、水道事業体にできるだけ安価なエネルギーを使っていただけることにも挑戦しなければならないと考えています。新たな付加価値として推進しているBIM／CIMも同様であり、運転管理に関わる「職」を守ることを前提にしながらもデジタル技術を駆使し、効率性を追求することで発生する費用を少しでも軽減できないかと考えています。こうしたコンセプトとソリューションによって、いかに多くの選択肢をご提供できるかを重視しています。結果として企業活動として非効率になっていることも多々ありますが…（笑）。

青木　企業としては極めて重要な要素となる直近の効率性よりも将来の水道の「持続」に向けてチャレンジしていただいていることはとても心強く、改めて敬意を表したいと思います。水道事業体の課題解決に向けて、我が事として取り組んでいただける企業と課題認識を共有することは殊更重要であると改めて感じました。その観点から、水道管路を軸にした課題認識を整理させていただければと思います。管路に限らず、水道を取り巻く課題は、ヒト・モノ・カネの全てにおいて八方塞がりの状態と言えます。ヒトに関しては、ピーク時と比べて水道事業に従事する職員は4割減っており、かつては事業体が自ら配管していたものも今では直営で施工する事業体はほぼありません。今後の人員確保に向けても「水道」という仕事は人気がないというよりは、若者にとって職業選択のメニューとして意識されていないように感じています。これだけライフラインに直結する大切な仕事であるにもかかわらず関心が低いことは悩ましいものがあります。我々の先輩達が良いものを造り過ぎたのかもしれませんが、結果として、住民から見た水道の「奥」への関心が稀薄となり、「当たり前」が光と影の両面を導き出す様相を呈しています。モノについては、よくご存知の通り、高度経済成長期に集中的に整備された管路や施設の老朽化が進む一方で、基幹管路の耐震適合率も4割程度にとどまっており、しかも能登半島地震の被災地の実状を見ると、適合管とされた一般継手管で本当に大丈夫なのか怪しいという見方が強まっていることも大きな懸念材料です。カネに関しては、然るべき投資を行うための適正な水準までなかなか料金を上げられない事業体が少なくありません。ここに来て、漸く料金改定に踏み切る事例が増えていますが、供給単価が給水原価を下回っている事例も少なからず見られます。

住民の水道への苦情や不満は少ないですが、それは感謝されていたり、高く評価されているのではなく、その価値を忘れられているに過ぎません。結果として、多くの首長や地方議員が料金改定の切迫性を理解できていない現実があります。本来なら2割から3割上げるべきなのにもかかわらず、上げていない所が少なくありません。この悩ましいミスマッチの解消のためには住民の水道に対する理解の深まりが不可欠です。特に、管路整備のように狭い穴の中でパイプを取り替える仕事に誇りを持っていただくことが大切です。水道人としての気概と言っても良い誇りがベースとして育まれる環境を整えねばと強く思っています。

角社長らの案内で研修施設建設工事の進捗状況を確認

地元企業として地域でPR…角
耐震化と更新率上昇の素地に…青木

角　青木理事長が示された課題認識については、私も同じように受け止めています。ヒトについては、実際に採用活動を行っている中でその厳しさを実感しております。一方で、文系学生の希望者は多く、「地域貢献」が文系学生にはササって頂けると感じています。一方、理系に関しては、そもそも建設分野全体が採りにくくなっており、ましてや水道では…という印象です。そうした人たちがどのような方面に行くのかと言うと、1つはシステム開発業界、さらには起業して社会貢献したいと考えている人が増えていると感じています。そうした状況からしますと、広報のあり方としてターゲットを明確にしていくべきと考えています。例えば、地元に留まり、根づきたいという方々が多くなってきている印象もありますので、水道はそのニーズに応え得る業種としてアピールすべきと思っています。そして、この観点で学生の心にどう響かせるのか…？　私は、マネジメントという魅力ある言葉をキーワードにするのも一考と思っています。地元で仕事をしたい人に水道をマネジメントすることの魅力をアピールできればマンパワー不足を補えるのではと考えています。地域の暮らしに根づいている水道という職業としての魅力を大学や高専、高校生、さらには小中学生も意識してPRすべきと思います。一方で、カネ、つまり、料金の問題については、青木理事長が言われたように何よりも水道の現状を知ってもらうことです。そのためには、拡がりと深みのある広報が必要ですので、広報にもターゲットによる色分けが大事と思います。当社では、研修施設についても小学生の社会見学のコースに提供できればと考えておりますが、そうした機会に併せて物流倉庫も見てもらえれば、いざという時のためにいろいろなものが備えてあることを実感してもらえるのではと思っています。これは若者の地元志向とも合致するのではと思っておりますので、こうしたことも草の根的に進めていきたいですね。

青木　まさに地域に開かれた企業としての姿勢が強みになりそうですね。

角　人材に関しては、もう1つ、当社が研修施設を作る構想を固めたタイミングで準備を始めているのですが、海外の人材を対象に日本の優れた水道システムについて学べる「学校」を海外に作りたいと考えています。まずは配管の分野で考えており、当社が海外拠点として進出している一つであるベトナムで展開していけないかと考えています。ベトナムでは昨年8月に現地で初めて特定技能の試験が実施されていますが、その試験内容を見ますと、いずれも筆記のみの技能試験と日本語試験で実技はありません。これを踏まえ、まずは日本語と水道の基礎知識を現地で修得し、その後は日本で当社の研修施設を活用して実技を学んでもらうという手筈です。これにより、配管技能者による集団・組織を形成し、地元の企業に安心してご用命いただける機能を構築できればと考えています。まずは、ベトナムを手始めに学校を作り、配管技能者を育てられればと考えています。そうした人々が日本に留まるのも良いですが、自国に戻って当地の水道に貢献してほしいという願いもあります。それが日本としての役割とも思っています。こうした思いに至ったのは、10年程前にスリランカの水道を視察する機会があり、地元の方から、「いくら浄水場で良い水を作っても、それを管路で数十㍍通せば飲めない水になってしまう」とお聞きし、管路整備が重いテーマになっているもののその担い手がいないという実状を、恥ずかしながら初めて知るところとなりました。海外のこうした厳しい実状に触れて、管路を司ることで広く貢献できる会社になればという思いを強めることとなりました。一気には拡げられませんので、まずはスモールスタートということで、親日でダシ文化で「食」の面でも共通項が多いですので（笑）、ベトナムから第一歩を踏み出したいと考えています。

国内には地元に貢献したいと考えている若い人は多く、職業としての水道の魅力を発信することで地元に根づく人材を確保すること。次に、海外からの人材の活用と育成。これらを当社なりにやれることをまずやりたいと思っています。この取り組みに関しては、フソウというよりは、管工事も含めた地元の企業として「水道」という職種を地域でPRしていきたいと考えています。これに関連して、フソウでは給付型の育英会制度を整えております。2016年から開始し、小規模ではありますが、全国からの応募者はフソウがどんな会社なのか勉強してくれますので、自ずと「水」を意識してくれるようになります。

青木　国の奨学金制度も小さくなってきている中、水道界への誘（いざな）いにつながるアプローチですね。こうした地道な取り組みが国民の水道に対する意識づけにつながるでしょうし、有難い限りです。

角　やり方はいろいろあると思いますが、やはり、水道界として仕組みを作るような働きかけが大切です。当社はその一翼を担う意気込みで努めてまいりますが、願わくは一企業ではなく、業界全体として若手の育成に努めていくような基金があっても良いのではと思います。

青木　育英会で恩義を感じたからと言って、必ずしも入社してくれるとは限らない中、社としてのメリットだけでなく、業界全体の利益を追求されていることに敬意を表したいと思います。こうした地道な営みに根差した戦略やマネジメントがあってこそ国民理解が進展します。この点について産業界の皆さんにご理解いただき、これを水道界の一大ムーブメントにできればと考えています。

「国民理解」の要素を多々包含…青木
住民に感謝された原体験が今に…角

フソウ社内で同社社員にエールを送る青木理事長

角　そのためにも、国民の水道に対する理解の深まりですね。水道事業体による料金値上げの報道に対してX（旧Twitter）でトレンドに入るほどの関心の高さが窺える一方で、未だに「なぜ値上げするのか？」という論調も目立ちます。政治の問題もあるのでしょうが、住民に実状を知っていただくことは殊更重要です。先程、当社の物流倉庫をご視察いただいた際に、「香川は災害が少ない」と仰っていただきましたが、渇水に加えて潜在するリスクは当地にもあります。実は、香川県民にとって命綱とも言える香川用水の下には、日本最大の活断層である中央構造線が走っています。こうした実態、香川県民にとって重要な情報も住民に知ってもらうことで、備える意識が育まれるべきと考えています。

フソウによる研修施設の建設について

青木　先程は建設中の研修施設の現場を拝見し、来年6月の完成に向けて順調に整備が進んでいることを確認し、心強く思っています。

皆さんご存知のように、大口径管路の接合を学べる研修施設は、日本には東京都と名古屋市の2カ所しかなく、この点については協会にもご意見をいただいています。全国的にまだまだ基幹管路の耐震性が不足している実状からも、国の言う「急所」の強靱化への機運の高まりも期待される中、研修施設が足りない状況は悩ましいものがあります。

私自身、大口径の管の接合を学べる研修施設を増やす必要性については理事長に就任以来、痛切に感じていたことで、各事業体に対応を打診してきた経緯もありましたが、そうした中、フソウさんから申し出いただき、協定を締結できたことは、自社の技術力の確保だけでなく、水道界全体への貢献を意識されているとのことで感謝しております。北海道を拠点とするFUSOグループのアクアパイプテックも加えて、高松、札幌と4大拠点になることで、基幹管路の耐震化と更新率の上昇に向けた素地が整います。

角　実は、当社の研修施設に大口径も入れることを考えたきっかけになったのは、当社の粟田顧問（名古屋市上下水道局OB、元水道技術管理者）に勧められて名古屋市の研修施設を見学させていただいたことでした。その時に、大口径の講習も見させていただいた際に、顧問から「これができるのは名古屋と東京の2カ所だけ」とお聞きして、これは水道界における大きな機会損失と感じました。講習を受けられる場所が遠くにしかないことで諦めてしまう人がおられるのであればそれは勿体ないと思い、どうせ作るなら、大きい管もということになりました。そういう意味では、そもそものきっかけは軽いノリでしたね（笑）。

青木　その軽いノリに我々も講習会で乗っからせていただけるということで有難い限りです（笑）。

角　まさかこの度の協定締結といった水道界における大きな流れになるとは思ってもいませんでしたが、多くのご関係の皆様からアドバイスもいただき、ご縁もあって、こうした取り組みに参画できていることは誠に光栄で、当社およびグループ会社の研修施設をご利用いただけることを大変有難く思っております。水道分野で仕事をさせていただいている企業として冥利に尽きるものがございます。

青木　基幹管路の更新・耐震化につながる大口径管路の講習の機会が大きく拡がることで、水道システムのこれからの100年に向けた安心感が高まります。その点からもフソウさんとの今回の協定締結は大変心強いものがあります。今後も地域に根差した中での水道界への貢献の一翼を担っていただければと思います。有難うございました。

角　こちらこそ、今後に向けて貴重なご意見をいただき、感謝申し上げます。引き続きご指導のほど宜しくお願い申し上げます。